04族はビジネス・リヴだ

通勤時間2時間ものともせず、千葉、埼玉、神奈川などの04から始まる電話番号から03地域に勤務するビジネスマンを"ゼロヨン族"という。自分の根城をどっかり見据え、地域でのイベントに、行政に、ボランティアに積極参加する。仕事人間からの解放に向け、彼らは胎動する。

撮影／高橋真二郎　取材・文／奥山宏実

バブルの時代、会社一途で家庭を顧みなかった男たちの関心が、いま変化しているという。彼らの関心は、今や家庭や地域のコミュニティに向かっている。その中心は、いわゆる団塊の世代の男たちだ。バブルの崩壊は、彼らにどんな教訓を与えたのだろうか。

「団塊の世代の男たちは、同世代の生存競争でもまれ、学園闘争などいくつかの政治的闘争を経て、その反動か、会社では引きこもりがちというか、社会的発言をせずバブルの実務部隊として忠実に働いてきました。ところがここ数年、彼らが会社ではできなかった人間的つながりを求めだしたんです。そのひとつの方向がコミュニティ活動なんですね、とくに大東京圏の周辺地域で活発です」

と話すのは野田正彦さん。野田さんは大学で比較文化精神医学の講義をするかたわら、ノンフィクション作家として活躍。『中年なじみ』などの著書も多い。

ところで、コミュニティに復帰した彼らの活動ぶりはどんなふうなのだろうか。まさか学生時代にもどって、我々は仕事をしている人を社会人という、しかしそれは間違っている。仕事は社会活動ではなく、経済活動だ、じゃあ社会とは？　仕事場ではなく、コミュニティだ、コミュニティとは生活共同体のことだ、自分や家族が住み暮らす生活の場、地域の公益に参加してこそ社会人なのだ、井戸端レベルの活動こそが、脱会社人間の新たな市民権運動なのだ。なんて屁理屈を並べてはいないか？

「いやいや、そんなふうに頭でっかちな理屈を振りかざす人は、04族にはいません、皆、楽しいからやっているだけ、柔軟でノリのよい男たちばかりです」

歳月が、彼らを変えたのかもしれない。

都心に勤務する彼らが夢のマイホームを実現できたのは、電話番号が04から始まる千葉、埼玉、神奈川といった、通勤時間2時間のドーナツ圏だった。地縁のしがらみがなく、同世代ばかりが隣近所の新興住宅地では、音頭取りさえいれば、自由にさまざまな催し物ができる。学園祭のノリでツルむのは、団塊の世代にとってはお手のものだ。

松戸市の障害者福祉施設で、右が下久保俊一さん。

つい先日開催された自治会恒例の餅つき大会。野田康博さんらが主催する。

「じゃおの会」幹事者、中島人間部を描いて。

3回の転職、町会議員、二足のわらじで街づくり。

実際に多彩な活動をしている人を紹介しよう。まずは『ゼロヨン族』の名付け親、千葉県印旛郡栄町の野田康雅さん。彼はドイツやベルギーでの長い生活経験を生かし外資系の会社に勤務していた。以前は自地共に認めるモーレツ社員（これももはや死語？）だった。だが93年、印旛沼と隣あわせの栄町にカヌー付きの家を購入後、自治会に加わる。

「持ち回りで半強制的だったんです。でも彼らが初めて3つの自治会共同のお祭りを企画運営しました。400人近い人が集まり大賑わい。好き勝手に屋台を出して、夜中まで飲めや歌えで、檀まで自分たちで作って、文化祭やらお餅つき、お年寄りの慰労会もやりました。いろんな職種の人が得意分野で参加して、いや本当に学園祭みたいに盛り上がります」

そんなこんなしているうちに、町の年間予算をはるかに超える巨費華な町営ホール建設計画が起こった。

「自分が払っている税金の使われ方がおかしい。行政も悪いけど、行政に無関心な町民であるのもおかしいとの思いが強まり、自治会の仲間6人で町議会選挙に立候補したんです」

92年のこと。6人は勢いだけで立候補し、選挙戦略もなにもなかったから支持者が割れ、当選したのは野田さんだけだったが、議会に風穴をあけるのには成功した。

「ところが当選後、議員とサラリーマンの両方は仕事に支障をきたすと会社側に阻止されました。公民権というのは、自由に政治に参加できることのはずなのに」

野田さんはきっぱりと転職し、二足のわらじをはき続けている。

半年のボランティア休職。ありのままの自分発見。

会社が社会貢献を支援する場合もある。富士ゼロックス関東営業事業部のテクニカルスペシャリスト、下久保俊一さんは、会社が募集したソーシャルサービス制度を利用して半年間、ボランティアに勤しんだ。

「自宅から近い、松戸（千葉県）の身体障害者授産施設です。ここは重度の障害を持つ人の作業所。送迎の手伝い、作業のサポート、食事やトイレの介助などをやりました。車椅子を持つような仕事、男性の障害者の人のトイレ介助など、男手がすごく必要なのにボランティアは男性が少ないのです」

下久保さんがボランティアに参加したきっかけは、地域の子供会。

「ソフトボールのコーチをずっとやっていたんです。楽しいです、一緒に遊んでいる感じ。で、ある時、健常者と遊ぶだけではなく、障害者とも同じように交流したいと思って」

90年、会社が制度を発足させた時、ためらわず応募した。

「初めは、人助けの気持ちがあったのかもしれない。でもやっていくうちに、相手ができないことで、僕ができることをやっているだけなんだってことがわかった。障害者との関係だけじゃなく、会社でも家族でも不得意なことを補い合いながら成り立っているわけじゃないですか。それだけなんです」

しかし会社を不在にすることの、不安や焦りはなかったのか。

「初めは気になったかな。でも施設は平和なんです。時の流れも人間関係もゆったりしていて、どうしてもできないこと、分からないことは誰かに助けてもらう……それは人間としてちっとも恥ずかしい態度じゃない。こう認識できたら、会社での仕事や人間関係も、ありのままの自分で接すればいいんだって、なにも怖くなくなった」

自分を解放することができた、下久保さんは現在、エンジニアをサポートするエンジニアの仕事をしているが、手に負えない機械の故障などは、素直に降参してしまうという。

「以前なら、お客さまの本社に電話をして不明点を聞くなんて、僕の力不足を露呈するようでとてもできなかった。でも今なら、すみません、ちょっと分からないので電話を貸してください、と言えます」

週末は子供会、ボランティアに加え、民生委員の活動も加わった。

「土日が忙しいから月曜は職場でゆっくり休みますって、会社にも公言してます（笑）」

地域の活動をしたいので、定年前にリタイア。

団塊の世代のちょっと先輩に当たる神奈川県藤沢市の守永英輔さんらは、『じゃおの会』を作って3年になる。おやじの逆さ読みで『じゃお』。会の活動をもっと活発にしたいため、守永さんは定年を前倒しにリタイアしてしまった。

「メンバーは130人前後です。神奈川県下在住の人、月に一回の勉強会が中心で、講師を招いてさまざまなテーマを話し合います。ゴミや地域、健康や高齢化問題、子供や学校、どれも自分や地域との関わりが実に深いのに、今までは無頓着過ぎた。これじゃあ定年になっても地域に恢着除できないって」

何をやればいいか手探りで始め、お年寄りを招いて男たちが作った手料理を披露したり、農家に援農に行ったりしている。

04族は着実に、ビジネス・リヴを牽引しているのだ。